東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十六卷　第一號

大正十二年一月一日發行

新餘剰價値說及社會階級協和論　法學博士　田島錦治
租稅配分に於ける公益逆比の原則　法學博士　神戸正雄
個人と團體との關係　法學博士　財部靜治
サン・シモンの社會改造哲學と社會連帶思想　文學博士　米田庄太郎
マルクス的階級概念　文學博士　高田保馬
物價調節對米價調節問題　法學博士　戸田海市
資本論中或る一句の各種版本に於ける異同について　法學博士　河上肇
今後の植民政策の基準　法學博士　山本美越乃
農業勞働自治組合制　法學博士　河田嗣郎
營業稅改正論　法學博士　小川鄉太郎
物價問題の統計的研究　法學士　汐見三郎

第十六卷（第一號一七四）　一七四

農業勞働自治組合制

河田嗣郎

一　社會主義運動と農業

從來社會主義運動といへば、何れの國に於ても殆んど都會の工業勞働者階級を地盤として行はれたものである。社會主義思想が全然田舍には入込んで居ないといふのではないけれども、それが發して社會主義運動となるまでには田舍の事情は成熟して居なくて、殆んど謂ふに足るべき運動を見ることが出來なかつた。

從來田舍に行はれた社會運動といへば、勞働者の間に於ける職業組合運動か然らざれば彼の產業組合運動に過ぎなかつた。然かも前者はたゞ歐洲の或少數の國々に於て少しく之を見るに過ぎない位のもので、たゞ獨り後者のみが諸國に廣く行はるゝに過ぎなかつた。然るに元來產業組合運動なるものは、經濟の現狀に對する一の改良運動たるには足るけれども、之を以て社會主義運動と爲すべきではない。そして又それは、十分デモクラチックなものではあるけれども、尙ほ資本主義との妥協を超越することが出來なかつた。

若し從來農村にも社會主義の建設的運動が行はれたと謂ひ得るならば、それは大抵は「新しき村」式のものたるに過ぎなかつた。卽ち少數なる社會主義的傾向の人達が、やゝ周圍と隔絕して、小天地に理想の共產的團體生活を建設して、よく謂へば模範的な、惡く謂へば獨りよがりの生存を、試驗的に實行する所あるを見るに過ぎなかつた。而して此種の共產團體はモアーのユートピア以來、カベーのイカリー旅行記以來、下つては又エーデンの實地經驗[1]の如き、更には武者小路氏等の試みの如き、思想の上にも實際の上にも、多くの典型を見ることが出來、亞米利加のやうな新天地に於ては殊に多く其の實際的な建設を見たのである。然るに此等の多くは、たゞ單に紙上に描かれたるユートピアたるに過ぎないか、然らざれば試驗として行はれ然かも大抵失敗に終りたるものであつて、未だ以て時代の傾向を動かすに足る一般的の運動とはなり得なかつた。そして其等が多くは田舍に於ける建設たりしことは、事の性質上より攷へても正に然かあるべき所だが、さればとて其等が農村に於ける社會主義的建設運動として、一般農村改革の事業を爲すに足るほどのものでなかつたことは、言を俟たざる所に屬する。

すべて此等の意味に於ては、從來殆んど農村を舞臺としては社會主義運動は行はれなかつたと謂ふことが出來る。併し乍らたゞ彼の土地制度改革運動に至つては、都會の土地といはず農地といはず、一般的に土地私有制を革めて其の國有其他の形式に於ける公有制を樹立せんとする運動

1) Frederik van Eeden, die glückliche Menschheit, Berlin 1913.

として、可なり著明に行はれて來た。然かも其の運動に於ては農地に對する論議と實際運動とが頗る目立つて見へたことを認めねばならぬ。從て從業農業社會主義といへば專ら此の農地所有制に關する議論と運動とを指すものとなつて居た。[2]

即ち從來の實狀では農業又は農村生活に關する一般的なる社會主義運動といへば、土地制度改革運動たるに止り、未だ以て農業一般の組織、其の運營の方法、更には農村共同團體の組織機能等に關してまで、現狀の改革と新しき建設とを行んとするほどの意味に於ける運動とまでは進み得なかつた。

尤も右に說く所は諸國を通じての概括的の說明たるに過ぎぬ。又それは既往に於ける大體の有樣たるに過ぎぬ。從て之に對しては例外あるを免れ難く、伊太利と露西亞とに於ける狀態は、實に其の例外として著明なるものに屬する。即ち伊太利に在つては夙に一八七・八〇年代より農業者の間に勞働運動が勃興し、その運動は漸次社會主義的傾向を帶び來り、近時に於ては特に其の傾向が鮮明になつて、伊太利の農村特に南部伊太利の農村は、殆んど赤化してしまつたと謂つても甚しき過言にあらざる有樣に在る。[3] 又露西亞に在つては、曩に一九〇五年に於て小ながらも農業を對象とする革命運動が行はれ、更に一九一七年には人も知る如く彼の共產大革命が行はれて、その共產經濟建設の爲めには、農業に對する改造のプログラムに大いに力瘤が入れられ、然

2) 拙著『農業社會主義論』參照
3) 拙著『農業勞働と小作制』一三七——一四四頁參照

かも又ソウエート政府の執れる改造の方針と農村の實狀とが齟齬して、其間種々の困難なる事情が生じ、要するに彼の大革命後の共產露國建設の大事業の成否は、農村と農業との動き方如何に依て決定されんとするの狀況に在る。[4]

されば此等の國に於ては、農村に於ける又は農村に對する社會主義運動は、一般的大改造運動として行はるべき運命にあり又は現に大いに行はれて居る次第であつて、實に從來に於ける二大例外といはねばならぬ。けれども之は實に從來に於ける例外と見るべきよりも、近時に於ける一般的傾向の先驅と見る方が適當なのである。卽ち從來は餘り農村に社會主義運動が行はれなかつたけれども、近頃は傾向が變つて來て、農業を舞臺とする社會主義運動の大いに行はれざるべからざる狀勢が生じ、その狀勢が先づ伊太利や露西亞に於て發露しつゝあるものと見なければならぬ。されば之こそ今や露國革命の行はれたる以後に於ては、バルカン地方の諸國の間には著しく農業社會主義運動が擡頭して來た。又獨逸や墺太利や洪牙利などに於ても、農村に於ける又は農村に對する社會運動の大いに社會主義運動化せんとしつゝあることは、種々の情報に照して否定し難き所なりとする。[5] 又英國其他の歐洲諸國間にも漸次多少其の傾向を見るに至り、我國の農業勞働運動も亦小作運動として、比年少しづゝ赤色を帶びんとしつゝあることは、之を認めねばならぬ所であらう。

4) 本誌前號所載拙稿『勞農露國の農業』參照

5) 『農地分割に關する中歐の新法制』國際勞働局發行，國際勞働局報一九二二年九月號所載(大阪朝日新聞譯載)參照

二　農業に對する組合社會主義者の計畫

從來社會主義運動の舞臺となり得なかつた農業も、今や思想界と經濟界とに於ける狀勢の一般的なる變化の爲めに、漸次に其の渦中に卷き込まるゝに至り、之れに捲き込まれるといふと案外早く運動の發展を見るに至りつゝある。茲に於てか新しく表はれて來た所の社會主義の分派特に組合社會主義（ギルド）の如きに在つては、從來の社會主義の諸分派に比較して、大いに農業に注意する所あり、其の改造の方針や計畫に就いても、大體の見當をつけて掛らんとする傾向を取つて進みつつある。斯かる狀勢の變化は、むしろ農業なるものが、國民食糧問題に直接の關係を有し、然かも其の國民食糧問題が、先般の大戰を機として大いに其の意義の重大なるを諸國民に（特に英國民の如き）に痛感せしむるに至りたることを、第一の理由とするものと謂はねばならぬ。それに又露西亞といふ依然たる農業國に於て共產革命が行はれ、其の革命は國柄としてどうしても農業に對して直接に關係せざるを得なかつたことも、農業なるものに對する一般の社會主義的注意を喚起するに至らしめたる大いなる理由を爲すものと見なければならぬ。然るに又更には、先般の世界大戰に依り、戰前餘り極端にまで押進み終にクライマックスに達したりと思はるゝ資本主義的な商工本位の經濟と重商主義的な貿易經濟政策とが、あの大戰の爲めにやゝ其の支配力を破壞

せられ、少くとも內部よりの瓦解を或程度に於て餘儀なくされ、それが爲めに從來單純に營利主義を謳歌し拜金熱に冒されて居た一般の人心が、多少ともに覺醒せらるゝに至り、國民經濟の眞實の構成は必要本位觀に依て行はれ、農業其他の原始產業の堅實なる基礎の上に築かれねばならぬことに、少しは氣が附いて來たことも、狀勢變化の大いなる一理由を爲すものと見ることが出來る。卽ち斯かる狀勢なる所へ以て來て一般的に社會主義思想が戰時の動搖に連れて蔓延して來たものだから、茲に大いに農業に對する社會主義者の注意と計畫と努力とを見るに至つた次第なりとする。

然らば今頃の社會主義者は、農業に對して如何に之を改造せんと企つるかと謂ふ問題だが、露西亞のボルシエヴイズムの人々の計畫と企圖とに至つては、既に私が本誌前號に之を述べた所に照し見れば明かなる所で、茲に又繁說を俟たざる次第であるから、茲には主として組合(ギルド)社會主義の人々の見る所を窺ふことゝする。

組合(ギルド)社會主義の人々は、其の一般的なるギルド建設の企畫からして、農村にもやはりギルドを組織し其の組合團體をして農業經營を行はしめ、同時に又其の組合團體をして農村自治團體たらしめ、完全なる共同生活體として、農村社會組織の中堅たらしめんとするのである。而して組合社會主義の人々の見る所を以てすれば、斯かる農村ギルドの建設さるゝことは、先づ第一に英國

などのやうに農業の衰へ果てゝしまつた國では、其の狀態を復活せしむるに必要缺ぐべからざる所であり、まだ農業の然かく衰微せざる國々に於ては、其の狀態を維持し又更に大いに發展せしむるに必要なる所なりと考ふる。又次には斯かる農業自治組合の組織さるゝに依つて、甫めて眞實なる農村共同團體は出來上がる次第で、個人主義的にバラ々々獨立の農事經營を行ひ一家經濟を營む農民の粗雜なる集を以てしては、そは未だ以て眞實なる共同自治團體たるに足らず、村落に於ける自治制は、本物とはなり得ないと考ふる。更には又組合社會主義の人々は、現今人口が餘りに都市に集合して居住し業務を營むが爲めに、現時の社會組織が頗る不健全なる狀態に在り、爲めに國民一般の體質を虛弱ならしめ、其の純朴の氣風を頽廢せしめ、然かも益々農村の文化上に於ける又經濟上に於ける荒廢を來しつゝあることの弊害を思ふ所から、農村にギルド團體の組成せらるゝは、實に此の恐るべき弊害を亡ぼし、社會組織全般をして頗る堅實なるものたらしむる所以なりと信ずるのである。[6]

然らばそのギルズメンの考案する所の農村ギルド團體は如何なる團體なりやと問ふに、之はペンチーやコールやホブソンや其他多くの組合社會主義者が、工業方面に就いて考案して居る所のギルド團體と其の組織に於て多く異つたものではなく、謂はゞ彼等が工業勞働者に就いて考へて居る所のギルドの組織を、農業勞働者に當嵌めた迄のことである。試に少しくコールの說く所に

6) A. J. Penty, Guilds, Trade and Agriculture, London 1921, pp. 74-82.

就いて見れば、[7] 先づ何は扨て措き農業も亦完全なる自治を享受せなければならぬとして居る。即ち地方々々に於けるギルド團體を基礎として農業經營の組立が出來、その經營は完全なる自治の下に行はれ、勞働は自主的勞働として組合所屬の人々に依て行はれ、農業經營が全般として、の自治經營たると同時に、各經營主體たるギルド團體は又各々自治團體として、農業生産一切に關する業務を行ひ、同時に村落自治行政も此のギルド團結の道に沿ふて行はるべきものとするのである。而して此の改造されたる農業に在つては、現時の如く地代の個人的なる取得の行はるべきにあらざるは言を俟たざる所で、地代利得は一切共同團體に歸せなければならぬ。即ち農地は廣く之を國有とするにしても、將又各ギルド團體が之を所有するにしても、現時のやうな私人所有に依る地代の私人取得は行はれないことになり、其代りに社會的取得が行はるべきものなりとするのである。尤も實際の利得方法を如何にするかといふことに就いては、明細なる記述が行はれて居らぬが、原則として地代の個人取得の廢滅に歸すべきことだけは確立されねばならぬ大原則と見られて居る。

ギルヅメンの見る所を以てすれば、社會主義は國家社會主義者等の之を考へるやうに、たゞ大農にばかり當嵌るものではなく、大農でも小農でも之を實行するに差支ないとせられる。成程大農經營はその經營を一單位としてギルド團結を作り、其手に依て之を經營して行くには適當なも

7) G. D. H. Cole, Guild Socialism restated, London 1920, pp. 161-173.

のであつて、社會主義を實行するに便宜多きことは勿論である。彼の露西亞のボルシエヴイズムの人々が、頻りに大農經營の便利を說き、國家自身又は共產團體の手に依て大農地の大規模經營を行ふことを奬勵し、その狀態を進展擴大せしめんとするは、頗る理由あることたるに相違ないが、さればとて小農經營に於てキルドの組織され得ない筈はない。さればこそボルシエヴイズムの人々も、强いて露國在來の自作農的な經營方法を撲滅せんとは企てず、その狀態を維持し乍らも、やはり農業の共產化は行ひ得らるゝものと信じて居る次第である。

然し幾ら小規模農業にも社會主義組織が行はれ得るにせよ、そが農民各自バラ々々であつては、到底社會主義化は實現され得ない筈で、必ずや其等の小農民は組合團結を造り、其の團結の力に共同的に作業し　耕種の上に於ても、生產物の販賣の上に於ても、肥料農具家畜等の購入の上に依り於ても出來得る限りの共同の行はれんことは、必要欠ぐべからざる所とせなければならぬ。

何れにしても農村に於けるギルド團體は、一面に於ては生產組合團體たると同時に、他面に於ては消費組合團體たるべきものであつて、生產組合團體としては、農業に從事する人々のみを以て組織さるべきこと勿論だが、消費組合たる性質に於ては、直接農業に從事せざる者と雖も、苟も田舍住民たる限りは、之を加入せしめて何の不可もない筈である。寧ろ之を加入せしむるに於て、ギルド團體は單純なる生產者團結たるに止らないで、田舍生活を總括して完全なる自治的共

同團體として、其の機能を十分に發揮し得るものと見なければならぬ。要するに農村ギルドは農村生活の實質に觸れたるものでなければならぬ次第で、そがよく農業といふ産業を自治的に規律し得る働を有するものたると同時に、尙ほ廣く農村生活全般をば其の實質に於て自治的に規律し得るだけの働を有し、其の意味に於ては、中世都市のギルド團體の如き機能を有するものたり得るに於て、甫めてよく、農業一般の維持と農村文化一般の保持發展を爲し得るに足るものたり、社會主義的農業組織として、存立の價値あるものたり得る次第である。

三　必要本位の生産と定價制

現時の極端なる營利主義の弊害に堪え得ないで、資本主義經濟の改造を要望する者は、好むで『利の爲めにする生産を廢めて用(要)の爲めにする生産を興さなければならぬ』と主張する。而して此の要求は固より經濟一般に渉つての要求であつて、斯かる意味の改造が行はれ得るに至つて、甫めて諸種の産業は其の本然の立場に歸り堅實の基礎の上に立ち得ることとなる。然るに多くの産業の中に在つても、農業は特に此の營利的なる經濟と調子の合ひ兼ぬるものであつて、營利本位なる資本主義經濟の存續する限り、農業は到底よく發達し得べき望はなく、寧ろ漸次に衰退に傾くを免れ難い。されば農業の維持と發展との爲めには、經濟一般の調子が營利主義を捨て

て必要本位制に歸るといふことが、是非とも必要とせらるゝ所とせなければならぬ。[8]

所が今此の必要本位なる經濟を樹立するに就いて其の第一歩として行はるべき所のものは、生産物の價格をして現時の如く所謂自由競爭制の下に勝手氣儘に定らしむることなく、之を一定して所謂定價制（フイツキスド、プライス）を布くに存することは、容易に理解し得べき所とせなければならぬ。卽ち現今生産は專ら商品として所謂自由競爭市場に於て賣買せらるべきものを造るを以て目的とし、其の所謂自由競爭市場なるものは、そが一つの社會關係たるに拘らず、全體として之を統制する力を有し働を爲し得るものなきが爲めに、社會主義者の好むで之を呼ぶが如く、一の無政府的狀態を呈して居る。從て其所に出來上る所の商品の價格なるものは、たゞ其の場所と其の時折に於ける需給關係上の遇然なる事情に依つて定まり、生産費の關係も、其他一般的に正常的標準となるべしと考へらるゝ所のものも、殆んど多く之に對して準據たるに足らざる有樣なりとする。然るにも拘らず、此の定まれる價格の高低如何に依つて生産業務の營利上の損得は定まり、之に依て企業の成否は分るゝ次第であるから、生産企業者に取つては、此の價格の高低は最も重大なる意義を有せざるを得ない。

卽ち現今の生産企業上より見れば、最も重要なる意義を有する價格關係であり乍ら、然かも其の價格に定まれる準據なく、市場の景況如何に依て價格の浮動常なきものたるが爲めに、現時の

8) 拙著『農業經濟學』に貫く見地は之である。同書序文參照

生産企業なるものは、一般的に頗る不安定なるものであつて、浮沈興廢の甚しき、實に今を以て明を圖り知るべからざる有樣に在る。從て現時の生産業務は何れの方面に在つても、皆多少とも投機的ならざるはなく、廣く社會の必要を充さんが爲めに、之を目安として安定せる業務を營まんことは、殆んど望み得べからざる所となり、社會の必要とする所と生産の實際との間には、常に齟齬と懸隔との存するを免れ得ざる有樣なりとする。

生産業に於ける此の不安定なる狀態は、獨り生産業者に對して其の事業家精神を荒廢せしめ其他種々の惡影響を及ぼし、生産業務をして甚しく投機化せしむるのみならず、同時に又消費者に對して恐るべき害毒を流し、其の生活を不安ならしめ、引いては其の思想上にも動搖を及ぼし、終には人生そのものに對してまで定見なきに至らしむるをも避け難きに至る次第である。卽ち社會一般より之を見たる禍害は實に鮮少ならざるものであつて、現今經濟上の諸問題と又種々の社會問題とが、其の內容に於て此點に聯關せる所の多大なるは、少しく現時の社會經濟に就いて批評的觀察を試むる者の、誰しも見遁し得ざる所である。[9]

然るに今立歸つて農業の立場に就いて攷ふれば、農業なる業務が本來必要本位の生産業務たるべきもので、又安定せる業務としてこそ甫めて好く發展し得べき所のものなるが爲めに、現今一般の社會經濟狀態が斯くの如く不安定なるべき素因を包含せるもので、頗る投機的性質に富める

9) 拙著『社會問題及社會運動』第一編『現時の社會と經濟』參照

ことは、農業に取つては、實に最も大いなる苦痛たらざるを得ないのである。特に農家の生産する主要作物の價格が安定せず、それに對する需要に彈力乏しき所から、所謂市場價格の變動が他の多くの種類の工鑛業生産品に比較して遙かに其の度數も多く又其の變動の幅も大なることは、農業生産者に取つては、最大の苦痛たり困難たらざるを得ないのである。

所が農業生産物は食料品を主とする所から、斯く其の價格の變動常なきことは、其の消費者たる一般社會の人々の亦等しく苦痛とする所たらざるを得ない。現今食糧問題として喧唱せられつゝある所のものは、食料品の分量に關する問題たると同時に、實に其の價格に關する問題である。

されば農業に關聯して生産者及び消費者の双方の立場から之を謂へば、農業生産物の價格の安定せんことは、最も希はしき所たらざるを得ぬ。若し之に關して定價制の行はるゝを得るあらば、農業生産者は茲に甫めて生色あるを得べく、農業の基礎も定まり、同時に一般消費者の生活上の安定も齎され得ることゝなるべきものとする。即ち定價制の樹立に就いては、一般的にあらゆる生産業務に與はる者と消費者とが、之を希求する所たらざるを得ないけれども、就中特に農業生産者と消費者との之を希求する所の切なるは、否定し得べからざる所に屬する。

然るに此の定價制なるものは、實は同時に正當價格の制度であらねばならぬ。即ち一定されたる價格は經濟上正當なる價格と見らるべきものであつて、其の正當價格に於て定價は決定せられ

なければならぬ。一般的にいへば、定價は固より正當價格たらざるものであり得るのだが、茲に謂ふ所の定價は同時に正當價格たらざるべからざるものとする。而して其の正當價格なるものは、大體に於ては生産費を標準として定まるべきものたることは、彼の正常價格に關する經濟理論よりして明かなる所なりとする。[10]

若し定價制がたゞ定價たれば定り、そが同時に正當價格たることを要さないならば、其の制定は、戰時英國などに於て或種の商品に就いて行はれたやうに、たゞ政府の手だけに依つても行はれ得るであらう。卽ち生産者たらざる政府が外部からしてよい加減に之を決定し、法令の力を以て之を强行することも出來るであらう。然るに若し定價制が同時に正當價格制たることを要するならば、其の正當價格の決定は政府の力を以ては容易に行はれ難く、その決定をして十分眞實なるものたらしめんが爲めには、それはどうしても生産者たるものゝ團結に依り、其の團體の共同の働として、生産者の內部より行はれなければならぬ。而して其の決定に關しては、生産者の間に十分なる道德上の力と又之を統制實行する有效なる組織の力との備はることを必要の條件とするのである。茲に於てか其働は所詮之を生産者の自治組合たるものゝ働に待たなければならぬことゝなり、其間から又ギルヅメンの主張が表はれて來るのである。[11]

10) 拙著『經濟學要義』第一編第三章第四節「正常價格の構成」參照
11) Penty, op. cit. p. 46-55.

四　正當價格制とギルド

凡べて品物をば其の正當なる價格に於て賣買するといふことは、これは一つの道德上の問題である。而して中世時代に在つては此の道德上の見地が確立して居て、然かもそが宗教上の信念と結び付いて居た爲めに、正當なる價格に於ける賣買は其の時代に於ける一般の狀態で、然かもそれが當然の狀態なりとせられて居た。そして其考は固より歐洲諸國に於て著明に之を見た所だつたが、然し支那や日本の如きに於ても全く之を見ることの出來ぬわけではない。

基督教の教に依れば、「人が爾曹に對して爲すだけのことは何であらうと爾曹も亦之を人に對して爲すべきものなり」とせられたのであるから、人より得る所の代價以下の價値しか持たぬ品物を賣るといふことは、元來罪惡であると考へられる。賣買交換は常に對等の價値のものゝ間に行はるゝに依て賣買當事者双方ともに利便を得る次第で、然かも賣買交易は元來社會生存上の利便の爲めに行はるゝものなのだから、之に依て何人が儲けるといふのでもなく、各自が一般的に利便を得るに於てこそ、甫めて賣買本來の目的は達せられるものと謂はねばならぬ。然るに今各人が皆正直なる心を以て公平なる態度で相臨み、其間に賣買が行はれるものとすれば、其所に出來上る品物の價格は必ずや正當なる價格でなければならぬ筈で、正當ならざる價格は出來やう

にも出來得る餘地がない。されば正當價格の基礎となるべきものは、どうしても此の道德上の信念たらざるを得なかつたのである。

而して中世時代に榮えたるギルドなるものは、元來斯かる道德上の基礎の上に出來上つたものであつて、其の道德上の信念を失つてはギルドは成立するを得ざる性質のものである。されぱギルドは努めて其の信念を守り之を傷けざるやうにし、其爲めには生產品に對しては定價制を設けて、正當なる價格たる所のものを定價と爲し、組合團結の力に依て之を勵行し、苟も犯す者は之を罰するに躊躇せず、組合員中に之を犯し瞞着して以て獨り儲を貪らんとする者あるときは、組合より之を除名するを辭せなかつた。然るに當時の組合は其の產業部類に關しては獨占力を持て居たから、組合より除名せられるといふことは、實に生產者としての致命傷だつたのである。そして此の獨占力は若し當時の組合團結が上に述べた道德上の基礎の上に出來て居なかつたならば、種々の弊害を釀し得た筈だが、事實上組合は、其の基礎をしつかりと右の道德上の信念の中に打込むで居たものだから、その道德の地盤の失はれざる限り弊害は生ぜないで、正當價格としての定價制が維持せられて、社會一般に對して大いなる利便を供し得たのである。

然し乍ら、正當價格に依る定價制が維持せられ得んが爲めには、同時に必ずや生產品の品質の統一と其の品位の維持とが、遺憾なく行はれなければならぬ。卽ち一方に於て品質品位が間違な

く標準に叶へるものであつて、人々は安神して之を受取るを得る狀態なると同時に、其の各標準品位に對する價格が一定されて居るのだと、其の定價制は消費者の側からも信用を得便宜のものと考へられるけれども、若し品物の側に於ける品質がまちまちで品位の差等が標準化されて居なかつた日には、之に定價をつけて見た所で、それは信用ある正當價格として行はれ得る見込はなかつた。然るに中世のギルドは此の品質の統一と品質標準の維持の爲めには十分力を用ゐ、其爲めには組合の檢査機關をして實質的に權威あり信用あるものたらしむること、し、其の機關を權威あるものたらしむる爲めには、之を組織する親方たるものゝ人格と技倆とを十分修養せしむるに努め、從て親方たるに要する資格を嚴重にし、徒弟職人の制度を整へて、苟も親方たらん者は、其道にかけては押しも押されもせぬだけの技倆を備へたる者たらしめた。それと同時に又各生產者たる親方が生產を營むに就いては、其の仕事場、其の勞働時間、其の生產品の分量、其の抱ふる職人徒弟の員數等に關して一々制限を設け、苟も粗製濫造に陷ることなきを期せしむると共に、其の生產を品質本位的に又仕事本位的に營むを得る組織を造り、以て組合全體の製品の品位維持と聲價維持とに努むるを怠らなかつた。

されば中世のギルドが其の完全なる形と働と健全なる精神とを以て存在して居た間は、定價制は立派に維持された。そして組合は貨幣をしてたゞ必要の爲めに行はるゝ交易の媒介を爲すに止

めしめ、貨幣利得のみの爲めに生産が行はれ又交易の行はるゝ餘地なからしめた爲めに、定價制は其の理由からも亦よく同時に正當價格制たることが出來たのである。そして又組合が消費者と都合よく連絡を取り、交易はたゞ必要なる範圍内に於て行はるゝに過ぎなかたから、其間に必要以上に多くの商業が出來上つたり多くの商人が介入したりして、たゞ其等の商人の利得の爲めに無用なる轉々賣買の盛に行はるゝが如き狀態は、出來んにも出來得べき餘地なく、商人の單純なる營利的賣買の爲めに、正當價格制たる定價制の搔き紊さるゝことはなかつた。

斯かるギルドの働の行はれたことは、其の時代の社會に取つては、一般的に洵に喜ばしいことであつたが、悲哉中世ギルドの組織は都市の手工業を舞臺として成立し、農業には其の組織を見ることが出來なかつた　而してそれは畢竟當時まだ農業には貨幣經濟が行はれず、農業はまだ自給經濟を主面目として行はれ、一般的にまだ此種の自治的組織に依て生産を統制するに足るだけ事情の發達せなかつたに原因したものであるが、然し之はギルド組織としては甚だ遺憾なことであつて、そが都鄙全般に涉つて、一樣に生産整理の働を爲すに及ばなかつたことは、其所に其の弱點を包藏した次第と謂はねばならぬ。[12]

然し過去のことは致方ないとして、今や又一般的に極端なる資本主義の弊害救濟の爲めに、ギルド精神やギルド組織と共通なる基礎の上に立つ所の新しき自治組織が、産業一般に涉つて復活

12) ibid, pp. 56-63.

し建設せられんことを必要とするといふに就いては、今度こそ、そは農業にも行渉つたる一般的のものでなくてはならぬ。そして農業は、農民本來の精神からいふも農業といふ業務の本來の性質からいふも、又其の生産物の性質からいふも、斯かるギルド的精神を確立しギルド的團體を造り、正當價格たるべき定價制を建設するには頗るよく適合したものたらざるを得ない。資本主義が商工業方面を浸蝕し盡したる感ある今日に於ては、まだ其の蝕害を被ることの比較的少き農業方面には、古い正直な氣風と古い經濟との共に比較的多く保存されたるあれば、かゝる新たなる復古的建設を爲するは、農業の方面の方が、工業方面よりも、却つて其の事業に適し之をして容易に成就せしめ得べしとも考へられるのである。要するに農民精神と農業經濟とが、斯かる自治的組合制の建設と其の機能の發揮とに對して、頗る都合よきものたることゝ、又其の建設の此の方面に於て一層切要なるものあることゝだけは、容易に信じ得べき所と謂はねばならぬ。

五　眞實の民主制と農村自治組合

農業に從事する人々の間に、自治的なる組合團體が組織されて、其の團體の働に依つて、農業の生産も農産物の價格の決定も行はれ、然かも其の團體は堅實なる道德的基礎の上に立つて、生産者としての明確なる責任觀念の下に、生産物の品質品位等に關して、自率の働を爲し得んこと

は、又一面から之を見れば、眞實なる意味に於けるデモクラシーの建立され得べき理由を爲すものと謂はねばならぬ。

現今普通にデモクラシーといへば、そはたゞ自己の代表者を選出して、所謂代議制を造ることを意味するに外ならざるが如くに了解されて居るけれども、それは未だ決して完全なるデモクラシーたるに足らぬ。元來代議制なるものは、代表する人と代表さるゝ人との間に職務の各端に渉つて完全なる了解が行はれ、代表されたる人は代表者の言動が眞實に自己の意見を代表するものたるを得べやう、之を其の意見の上に於て支配することの出來る地位に置かれて居なければならぬ筈である。されば代議制なるものは、決して或人が他の人を其の全人格に於て代表するといふ意味合のものでなく、又斯くの如きことは、苟も人々が人格的に相異れる存在を有するものたる限り、出來得べき性質のものでない。尙又代議制は或人が他の人の意見を包括的に代表するといふ意味合のものでもあり得ない。人の意見なるものは本來包括的に一定せるものではなく、事毎に一々の場合に於てそれ〴〵意見のあるべき性質のものなのだから、事毎に關する意見の代表こそ代表者と被代表者との間に完全なる了解の存する限り能く行はれ得べけれ、總べての事柄に渉つて包括的に意見の代表せられ得べき筈のものではあり得ない。然るにも拘らず現今普通に行はるゝ代議制なるものを見れば、彼の議會政治に於て最も著明なるが如く、代議士なるものは他人

の意見を包括的に代表するものと見られ、然かも人一人を代表するのではなく何千人といふ人々の意見を代表するものとして働く仕組になつて居る。こんなことでどうしてそれが本當の代議制であり得やうぞ。されば現今の實際に於ては、代議制としての議會はたゞ名のみであつて、實は議員たる人々の自己の意見のみが多數決に依て行はるゝ一の獨裁機關たるに外ならず、代議制たる實質は寸毫も備はつて居らぬ。

されば若し現今デモクラシーなるものが、此の意味の議會政治の如きを意味するものであるならば、それは眞實の代議制でもなければ又眞實のデモクラシーでもあり得ない。眞實のデモクラシーたらんが爲めにはそれは先づ以て眞實の代議制を有せねばならぬ。然るに其の眞實の代議制なるものは、事務毎に行はるべきものなのだから、それは總括的なるものでなく、實に職分的なる代議制でなければならぬ。從てそれは多數の代議的團體の聯立せるものではければならぬ筈で、決して現今の議會政治のやうに單一なるものではあり得ない。[13]

然るに尙又之を攷ふれば、國家の事務の如き廣汎なるものに就いては、代議制に依るにあらざれば、國民各自の直接なる參與による政治は行はれ得ないけれども、小さき團體に於いて、然かも其の團體の職分の限定されたるものに在つては、其の職務は團體を組成する各員の直接參與に依つても行はれ得る。尤も些末な事務的なことに至つては、之を各員の直接參與に依つて行ふ必

13) G. D. H. Cole, Social Theory, London 1920, pp. 103-116 ditto, Guild Socialism Re-sta-ted, pp. 27-41

要はないけれども、其の團體の職分とする所に關する事項に就いては、直接參與を行はんとせば十分に之を行ひ得る次第である。所が元來デモクラシーなるものは、各人の直接參與に依る共同政治を以て最もよく其の意義に叶へるものとなすことは疑なき所なれば、斯かる直接參與制の行はるゝに於て甫めてデモクラシー本來の意義に叶へる政治の行はるゝものと謂はねばならぬ。所謂原始的民主政治(プリミチーブデモクラシー)なるものは、斯かる直接參與制を謂ふに外ならぬ。

要するに總べて斯くの如き性質のものなりとせば、今農業に關して自治的たる組合團體が組織されて、そが小團體ながらも多數に農村に存在し、各々獨立にして自由なる自治を行ひ、農業生産上の經營から農産物の價格の制理に至るまで、更には又農村に於ける一般的自治生活の各端に渉つて共同なる動作の行はるゝに至らんことは、眞實のデモクラシーをして茲に確立するを得せしむる所以とせなければならぬ。卽ち斯かる自治團體に在つては、其の團體が小さくて然かも團體員は村落一定の地方に永住して互に克く相識れるものなれば、其間に或職分について代議制の行はるゝ必要ある場合には、之を行つて然かもよく眞實の代議制たるを得べく、又職分の種類に依つては、かゝる代議制をすら用ゐず、團體各員の直接參與制を採り、然かも此の直接政治はかなり農村生活上の廣き範圍に渉つて行はるゝを得て、何れから見ても、眞實のデモクラシーの行はれ得べきことゝなるを疑ふことが出來ぬ。

然るに元來農業と農村生活とは、其の性質上共同自治的のものであつて、共同自治的なるに於て甫めてよく農村として平和に發達し行き得べきものである。卽ち飽迄クロポトキニズムに據て立つべきものであつて、ダルヴヰニズムに據るべき性質のものでない。農業が其の經濟としての地位を保ち、農村がその社會生活としての働を續け得んが爲めには、彼の强食弱肉的なる自由競爭や獨裁的なる資本主義やは、飽迄之を排斥せなければならぬ。農業が資本主義化することは取も直さず農業の自滅を意味し、農村に共同自助による相互扶助の精神の亡ぶることは、直ちに農村生活全體の崩壞を齎すこと丶ならざるを得ざるは、農業といふ經濟本來の性質と、農村といふ社會生活の性狀より之を攷へて、どうしても認められねばならぬ所なのだから、農業と農村維持の爲めには、又其の發達の爲めには、眞實なる共同自治制の樹立は、必要欠くべからざるものと謂ふ外はない。

然かも亦農業と農村生活とは言ふ迄もなく地方的のもので、統合集一に適せず、分散聯立ならざるべからざる性質のものである。今其の農業の間に眞實デモクラチックなる自治組合が發達して、產業と農村生活とに涉つて一般的に其の地方々々に於ける特色に據て立ちつ丶、其地に根生へせる共同自治生活を營むこと丶なり、其の各團體の聯合によつて又比較的大なる地方的結合が行はれ、それ等が又更に集つて終に國家的大聯合となるあらば、共同生活としての社會生活は茲

に甫めて堅實なるものとなり得るであらう。地方々々に根生へせる小共同生活の基礎なくして、國家的大共同を全體として堅實に造り上げんことは、所詮不可能事とせなければならぬ。其の意味に於ては、現今の國家、府縣、町村といふが如き集中的のもので分劃はただ集中の便宜の爲めに上から下りて來て行はれて居るに過ぎないやうなものでは、どうしても眞に堅實なる全體として纏れる社會共同生活は行はれ難い。外見堅實なやうであつても實質的に十分堅實ではあり得ない。これはどうしても下から根生へせる小さき地方的の團體が基となつて、其の自治的結合によつて先づ以て地方的共同生活が行はれ、其等が漸次集合統一されて、國家を成すものでなくてはならぬ。即ち下から段々に上に向つて成長したものでなくてはならぬ。而して此の意味に於て、農村ギルドの如き眞實にして堅固なる地方的小自治團體の多數に發生發達せんことは、今後に於ける社會生活をして、共同生活として完備せるものたらしむるが上に、必要缺ぐべからざる所とせなければならぬ。

總べて上の如く觀察することに依て、私は現今漸く農業方面に對して社會主義運動の注意の向いて來たことを喜ぶと同時に、其の社會主義的改造計畫としてのギルド建設の主張に、大いに翼賛すべきものあるを想はざるを得ないのである。惟ふに我國の如く勞働組合の基礎なき所に於て、

廣く工業方面と鑛業方面と交通業方面とに渉つて、一般的に產業の管理經營の爲めに、ギルド社會主義者の主張するが如き勞働自治組合組織を造り上げんことは、中々容易の事業ではあるまい。少くともかなり永き年月の準備的努力と建設とを要するものと見なければならぬ。然るに翻つて之を農業方面に就いて見れば、一面には彼の產業組合運動の近年著しき發達を遂げ其の基礎の確立せるものあるに加へて、近者又小作人の間に於ける運動の發展に伴ひ小作組合の發達實に夥しく急速なるものがある。然かも此等は農業といふ業務と農村生活との本來の性質からして、其の堅固なる發達の工鑛業方面などに比して頗る容易なることは誰しも之を認めないわけに行かぬ。從て今我が農村に於ける事情は、農業自治組合制の建設といふプログラムに對しては、寧ろ甚だ都合よきものであつて、事業は比較的容易に行はれ得べき望がある。今後の運動は必ずや此の方面に進み行かねばならぬと同時に、自然の傾向としても必ずや此の方面の選ばるべきことも、之を信じ得べき理由がある。

然し農業に於て斯かる改造が成就されん爲めには、社會一般の氣風と社會生活全體に渉る同趣旨の改造の着々準備せられ實行せらるゝことの必要なるは、言を俟たざる所とする。調子は勿論全體として合つて來なければならぬ。各方面の調子がしつくり合つて甫めてよく社會改造の交響樂は成立ち、又よく時代を動かす大音曲となり得べきものたるは、絮說の要なき所である（完）